語学教育センター20年の足跡を振り返る

語学教育センター所長　大橋　稔
若林俊英

はじめに

城西大学（現城西短期大学を含む）の語学教育の中枢を担う組織として，語学教育センターは2004年4月に誕生した。設立以来，本学における語学教育の充実と，本学で学ぶ学生のための学習環境の整備[1]を目指して歩みを進めてきた。その歩みが十分なものであったとは言い切れないかもしれないが，20年目の節目の年を終えるにあたり，これまでの歩みを覚書として記しつつ，これからの課題を展望したいと思う。

語学教育センターは専任教員と非常勤教員とからなる教員組織であるので，教育内容や環境の整備だけではなく，教育力や教員力の向上にも力を入れてきた。教員同士による授業参観制度の導入や，期末アンケートの結果に基づく授業改善計画書の作成，FD実施方法の改善などである。しかし本稿では，対学生の取り組みについての足跡を中心に辿ることにする。これが今後の語学教育をめぐる活動を考えるときの指標になると考えるためだ。

英語教育

センターが設立された当初の英語教育の中心は，社会的な関心が高まりつつあった能力試験であるTOEIC®（Test of English for International Communication，国際コミュニケーション英語能力テスト）の受験対策が中心だった。全ての一年生が履修しなければならない必修英科目であったTOEICイングリッシュⅠを中心に，より高度な対策を行う選択科目として，TOEICイングリッシュⅡ～Ⅳが準備されていた。

必修英語の授業は，学部のクラス単位で行っていた。しかし設立後は，2005年度入学の経済学部生と経営学部生を対象にプレイスメントテストを行い，その結果にもとづく能力別のクラス編成を導入した。その後，他学部（短期大学を含む）においても能力別クラス編成を行うようになる。また全学部でプレイスメントテストを実施するのと合わせて，学年末に統一テストを行い，学生の一年間の学びの成果を測定するようになった。

能力別クラス編成については，評価の平等性の問題など，さまざまな課題を常に意識しておく必要がある。またその課題を完全に解決することは不可能だと言っても過言ではない。入学する学生の英語力が多様化している状況を重視し，本学で学ぶすべ

ての学生が，一人ひとりの能力にあった英語を安心して学ぶ体制の確保がより重要との考えから，能力別クラス編成を現在も行っている。

第二外国語教育

センター設立当初，第二外国語科目として，フランス語，ドイツ語，スペイン語，中国語，韓国語の五つを開講していた。これらの構成は，一般的な大学の構成とほぼ同等だったと言える。しかし2009年，国際社会における中国経済の台頭，影響力の増大を背景に，中国文化への理解の重要性を踏まえ，中国語をセンターが注力すべき言語とする方針を定めた。翌2010年には，中国語教員を専任教員として迎えた。

また2010年代に入ると，本学では中央ヨーロッパ諸国の今後の国際的な重要性などを踏まえ，各国大学との関係強化を一つの方針とするさまざまな取り組みがなされるようになる。それと呼応して，センターでもハンガリー語，チェコ語，ポーランド語を第二外国語として開講することになった。中欧言語教育の充実は，他大学にはない特色となっている。また同様の理由から，マレー語も第二外国語として開講されることになった。

これらの第二外国語教育は，基本的には入門レベルの授業である。しかし語学教育の目的の一つに，語学を学ぶことを通じて外国の社会や文化に対する関心を育むことがある。これらの第二外国語を学んだ学生の中には，それぞれの国に関心を寄せ，海外研修プログラムに参加している学生がいる現状を考えると，一定程度の教育的効果は出ていると言える。また中国語や，フランス語，ドイツ語，韓国語については，検定試験に挑戦し合格する学生も出ている。

日本語教育

留学生を対象にした日本語教育も他の言語と同様，センターが設立当初から担当している。本学で学び，研究を行うために必要な日本語運用能力を身につけることが目的である。

本学で学ぶ留学生は，入試により入学した学生，交換留学生，中国の大連外国語大学との共同教育プログラムによる留学生と，多様な背景を有している。また日本語習熟度もさまざまである。より教育効果を高めることができるよう，入学時にプレイスメントテストを実施し，習熟度別クラス編成を行っている。

入試で入学した学生を対象とする必修英語の代替科目としての日本語Ⅰのほかに，選択科目として日本語特殊演習Ⅰ～Ⅵを設置している。この日本語特殊演習は，大学院を目指す留学生を主対象としたものであり，文法・語彙・読解等の日本語運用能力をより高めるための知識の習得を目的として授業を行っている。なお，授業に当たっては，日本の社会や文化を，より深く理解できるような教材も使用している。

すべての留学生が諦めることなく学び，研究することができるための日本語運用能力を教授することが日本語教育の目的である。その目的を果たすために，留学生一人ひとりの習熟度に応じた授業展開を実施できるよう工夫をしてきた。その結果，各種日本語検定試験にも挑戦し，合格する学生も多数出ている。

集中トレーニング

2009年に英語と中国語を特に注力する言語に定めたことにより，どのような教育を展開すべきかについての検討が2010年に始まった。特にこの時期，英語圏への長期留学を希望する学生が激減していたこともあり，希望者をどのように増やすかについても早急に対応が必要な課題として浮上していた。語学に対する意欲を高め，維持し，留学への関心を高めるための授業の新設，履修モデルについて検討した。

センターでの検討と学部担当者との協議を経て，2011年には英語と中国語の集中トレーニングという科目を新設することになった。この授業の特徴は，語学や留学，そして学んだコトバを使うことに関心があることを受講の条件と定めたことだ。開講年度には入試課の協力を得て紹介パンフレットを作成して広報を行い，新入生を対象にしたガイダンスでも，英語や中国語を学びたい人のためだけの授業であることを強調して履修を呼び掛けた。

履修条件を定めたことに加え，グループワークを多く取り入れ，受講生同士が協力して学び，問題の解決を目指す授業方法もこの授業の特徴となった。また英語圏や中国圏の文化についても学び，思考や発想の仕方の違いを理解できることを授業の目標に取り入れたことも，集中トレーニングの特徴であった。現在センターとして推進している語学授業の在り方の原型は，この時の検討，経験に基づいたものだと言えるように思われる。

英語カリキュラムの改革

2018年には，英語カリキュラムの大幅な改革を行った。センター設立から選択科目としての英語科目の充実を図ってきた。しかしそれらは，それぞれの授業が独立して存在しているだけで，学ぶことができる英語の体系を示し得るものではなかった。またこの頃，本学の新しいディプロマポリシーなどが制定，公表された。そこでポリシーに沿うカリキュラムに変更することを目指し，英語カリキュラムの大幅な改定を行ったのだ。

必修科目の位置づけを，英語を学ぶための基礎力を定着させるための科目とし，名称もコミュニケーション基礎英語に変更した。その一方で，選択科目を学生が自ら必要と考える英語力の向上を目指すための科目と位置づけることにした。その結果，選択英語科目の系統を「英語での表現力向上」「資格試験対策」「教養力の向上」の三つ

に整理し，学生は各自の関心，必要性に応じた英語の授業を選択できる体制を整えることができた。

この時，選択科目の一つであった「TOEICイングリッシュ」は，「資格英語」と名称を変更させた。基本的にTOEIC®の受験対策を行う授業であることには変わらない。しかしこの名称変更により，さまざまな英語の実力試験や検定試験の受験対策を取り入れるなど，柔軟な授業設計ができるようなった。また「教養英語」を新設したことで，英語を学ぶこと自体ではなく，英語を通じて何かを学ぶ授業を学生に提供できるようになった。

春季TOEIC対策集中講座

2007年度より，春休みを利用したTOEIC対策集中講座を開催している。大学生にとって二月三月の二か月間は，授業のない比較的自由な時間である。しかしその一方で，学びから遠ざかる期間にもなってしまっている。語学学習は，継続して行うことが何よりも重要で，学びの空白期間を作ることは好ましいことではない。しかし長期休業中に継続して学び続けるためには，学生の強い意志が必要になる。

そこでセンターの英語教員の有志で，三月上旬に英語を学ぶ機会を提供するために集中講座を開催することになった。この講座で学生は，TOEIC受験のための対策を集中して学ぶことができる。基本的には学生のレベルを問わず参加できることにしているため，受講者のレベルはさまざまである。しかし，春期休暇中に学ぼうとする学生たちであるため，学びへの意識が非常に高く，担当する教員としても遣り甲斐を感じることができる講座になっている。

2011年3月11日も，この集中講座を行っていた。その日の講師担当は大橋だったのだが，学生ともども講義に集中しており，避難しなければならないと思い至るまでにかなりの時間を要してしまった。学生たちとは「明日の講座は無理して参加する必要はない」ことを確認し，避難先のグラウンドで別れたのだが，翌日の講座に全員が参加しており驚かされたことは忘れ難い震災の思い出になっている。

Language Lounge

語学（特に英語）に苦手意識を持つ学生が多いのが本学の現状である。そのような中，語学力を向上させることを目標の一つに掲げて入学した学生が，その志を貫くためには非常に強い意志が必要になる。なぜなら，志を共有できる仲間に出会うことが難しく，切磋琢磨しながら学ぶ環境を確保することが困難だからだ。また大学という新しい環境の中で，新しい目標や楽しみを見つけることができれば，孤独な語学学習から離れてしまうようである。

そのような状況を改善するために2008年4月に開設したのが，Language Lounge

であった。これは語学に特化した学習スペースである。センター教員が選定した語学に関する参考書などが配架されており，利用者は自由に使用することができる。また開室時には専任教員が常駐しており，学生からの質問や相談にも対応する場とした。語学を学ぶ学生が集うことのできる空間を準備することで，学生同士の繋がりを作ることも開設の目的だった。

Language Loungeの運営は，専任教員が授業の合間を縫うようにして行うため，昼休みの開室が基本にならざるを得ない。しかしその状況を利用して，「昼食を食べながらネイティブ教員や留学生と話してみよう」をテーマに，「Lunch Time 留学」の取り組みを始めることにもつながった。またこの結果，留学生のみで集まりがちであった留学生と，日本人学生がつながる場所を提供できるようにもなった。

英語入学前指導

英語教員の授業担当の比率は，一年生対象の必修英語が圧倒的に高くなる。毎年4月に多くの英語教員が目の当たりにするのは，新入生の大多数が春休み期間中に高校までに学んだ英語を忘れてしまっていることだ。学びの空白期間を作ることによって，それまでの努力が無駄になってしまう。その結果，4月からの向き合わなければならない必修英語の授業で苦労しなければならなくなる。これはとても残念な状況だと感じていた。

そこで2012年度入学予定者より，希望者に対して英語入学前指導を開始することになった。これは英語担当教員がアドバイザーとなり，入学までの期間，参加者の英語学習をサポートするものである。また決められたカリキュラムを用いるのではなく，参加者とアドバイザーが相談しながら学ぶ内容を決定している。また地方出身の学生も参加できるよう，対面だけではなく，郵送やEmailなど，指導方法も柔軟に対応できるようにした。

プログラムを始めた当初は，学生に英語を学ぼうとする意識を継続してもらい，それまでに学んだ内容を忘れさせないことが目的であった。しかし近年では，入学形態の多様化に伴い，入学後の英語の授業に不安を感じるとの理由から入学前指導に申し込む学生が増えるようになった。そのため現在では，学習意欲を維持させることだけではなく，入学後の不安解消を目的にしたサポートにも力を入れている。

TOEIC奨励制度

TOEIC®は，二時間に及ぶ英語の能力試験である。そのため集中力の継続や，試験形式に慣れていることなども，結果に影響を及ぼすことがある。つまり継続して試験を受け続けることが，良いスコアを獲得するためには必要なのだ。しかし検定料は決して安いものではないため，学内で実施する団体特別受験制度（IPテスト）を利用し

た受験であったとしても，学生に繰り返し受験を勧めることは心苦しい状況にあった。

そこでセンターではTOEIC奨励制度を創設することにした。学内で実施するIPテストの受験結果に基づき，一定の基準を満たした学生にはIPテストを一回無料で受験できるようにする制度である。2010年に開始した制度であったが，初年度は予算措置が講じられていなかったため，専任教員のカンパにより費用を捻出することで始めた。そして次年度からは予算化された。

奨励制度の創設と並行して，大学に国際ビジネスコミュニケーション協会の賛助会員になることを働きかけた。賛助会員になることで団体プログラムの受験料が割引されるからである。結果，学生が負担する受験料が千円程度割引できることになった。またその後，奨励の対象となる言語，検定試験の枠を拡大し，現在では本学で開講している言語の検定試験であれば，一定の成果をおさめた場合，何らかの奨励を受けられるようになっている。

スピーチコンテスト[2]

本学の創立45周年事業の一環として，センター主催のスピーチコンテストを実施する案が提示された。コンテストの開催については多くの意見があり，活発な議論が行われた。また他部署の職員からは，「予算の無駄遣いではないか」と辛辣な言葉を投げかけられたこともある。それでも学習成果の発表の場を準備することは，語学教育の大切な役割であるとの考えから，コンテストを開催することになった。

2011年，第1回城西大学英語スピーチコンテストを開催した。約50名の応募者の中から一次予選を通過した14名に，本選でスピーチを披露してもらった。いずれのスピーチも若々しく，希望に満ちた内容だった。また本学の学生が演壇に立ち，堂々と英語でスピーチする様子を見ることができたことは，その出来不出来に関わらず，教員としてはとても誇らしい気持ちにさせてもらった。

翌年には，第2回英語スピーチコンテストに加え，第1回城西大学中国語スピーチコンテストも開催した。中国語スピーチコンテストについては，姉妹校である城西国際大学との対抗戦としての開催であった。その後も両スピーチコンテストは回を重ね，現在では全国から応募を得られるようになっている。また競争の場であることよりも，教育の場であるべきというコンテストの理念は，概ね多くの参加者より好感を持たれているようだ。

国際教養講座の開催

2015年には本学創立50周年記念事業の一環として，社会人向け講座「国際教養講座」を開催した。北坂戸にぎわいサロンを会場に，全6回，定員40名で行ったこの講座は，各回とも多くの参加者を得て，活発な質疑応答が行われるなど活気に満ちたも

のになった。学内では語学を教えている教員にとっても，一般向けに自身の専門分野について話をするこの講座は，とても意義ある体験になった。

センターには，語学教育を研究分野とする教員も所属しているが，語学教育以外を研究分野とする教員も多く所属している。またその多くは，歴史や文学，社会を対象とする，いわゆるリベラルアーツ系の分野を専門としている。さらにその対象も，アメリカ，イギリス，フランス，日本などさまざまであるため，普段の業務の中で，それぞれの研究について深く議論をしたり，立ち入ったりすることはありまなかった。

しかしこの講座をきっかけとして，担当講師同士で改めて研究内容について認識し合ったり，議論したりする機会が増えるようになった。またこれにより，教員間のコミュニケーションが促進された。特にコーディネーターを務めた大橋自身は，会場設営や受付，司会業務などのために全講座に参加したため，各教員の専門分野を知るだけではなく，普段の授業の様子を窺い知ったようにも思う。

コロナ禍とオンライン授業

2020年，突如としてもたらされた新型コロナ感染症による混乱は，本学の語学教育においても無縁ではなかった。むしろ，双方向性を重視した授業展開をしてきた語学教育は，より大きな影響を受けたと言える。授業をオンラインで行うための準備や，学生とのコミュニケーションの取り方など，それまでは教科書，辞書，そしてCDラジカセ，黒板があれば授業を成立させることができた語学教員にとっては，何もかもが未知との遭遇だった。

すべてが手探りの状態で始まった20年度の授業だったが，センター所属の教職員は一丸となって山積する課題に取り組むことができたと思う。「学びを止めたくない」という学長の意向を受け，英語ならば取り組み易いだろうとの観点からWebClassを用いた自学用教材を4月上旬には公開し，さらに16日には必修英語の授業配信も開始することができた。これらはご協力いただいた諸先生方の努力の賜物だったと感謝している。

他の言語科目についても，協力し合うことでオンライン授業を創り上げることができた。また非常勤の先生方からは，他大学での取り組みや工夫に関する情報を積極的に提供していただき，本学のオンライン語学授業の質的向上に協力していただいた。教員が教材作成と授業に奔走する一方で，事務室ではWebClassの使用方法に関する問い合わせなど，学生対応の大部分を担っていただいた。丁寧に対応していただいたことに感謝している。

コロナ禍という体験は，苦労が絶えなかったことは間違いない。しかしそれでもセンターの全教職員が一丸となり，課題に取り組むことができたことで，心的距離が近づいたようにも感じている。事務室から聞こえてきた「電話の音はもう聞きたくな

い」という叫びも，今では笑い話のような思い出である。また他大学の事情をよく知る出版関係の方からは，センターの専任と非常勤教員と職員の協力関係を称賛してもらえたことも誇りである。

これからの語学教育

コロナ禍がある程度収束した今日，授業は以前の状態に戻りつつある。しかし一度，立ち止まる必要があるようにも思う。語学の授業は，対面でコミュニカティブに行うことが理想ではある。しかし反復学習や，やり直し学習など，通常授業の補助としてオンライン技術が活用できるのではないか。また学生にとってより意味のある学習環境を提供できることになるのではないか。オンラインのスキルを手放す前に，検討すき課題だと思っている。

学習指導要領の改定などに伴い，学生の既修事項が変化している。これにより学生が既に有している「英語」の得意や不得意，好き嫌いの内容にも変化が生じている。例えば，英語が嫌いな理由が，以前は「文法がわからない」が主流であったのに対し，最近では「人前で話すのが嫌」という理由も目立ち始めている。このような質的な変化を捉えながら，特に必修英語科目の内容や，指導方法について絶えず検討し，改善を目指し続ける必要がある。

また必修英語科目については，なぜ英語が必修なのかについても検討する必要がある。これは，英語は必修でなくても良いと主張するものではない。これまで英語が必修であることを当然視してきたため，その理由を真剣に検討してこなかったことを見直す必要があるということだ。その理由を検討することによって，本学にとって必要な英語教育の在り方，方向性を明確にすることができるのではないだろうか。

近年の語学系アプリやChatGPTに代表されるような人口知能の発展は目覚ましい。このような時代においては，語学力として求められる内容は大きく変わるだろう。アプリやAIを活用しながら仕事や生活することが当然となる社会で生きる学生が身につけるべき語学関連の技術は何かを見定め，それに対応できるような教育内容を考え，また教員自身がそれに耐え得るスキルを身につけることが喫緊の課題だと考えている。

また外部評価との関係から考えるならば，学修成果の可視化，実質化という課題を避けることはできないだろう。先述の通り，習熟度別のクラス編成を行っている必修英語科目の評価の公平性の問題に加えて，複数名の教員で担当している同一科目名の授業の評価の公平性の問題などにも対応する必要がある。ルーブリックを活用した評価など，さまざまな解決策が考え得るが，教員間で意識共有を図ることが大切になるだろう。

まとめ

語学教育センターが誕生してから20年が経過した。20年という時間は思いのほか長く，センターとして問題や課題を発掘し，その改善を目指してさまざまな努力を積み重ねてきたことを，本稿をまとめることで改めて確認することができた。この努力はこれからも継続しなければならないし，昨今の社会的状況を考えるならば，さらに増して努力しなければならない。本稿がこれからの語学教育の方向性を考える一助になれば幸いである。

また本稿では語学教育という観点から，これまでの取り組みを今後の課題を含めて記述をしてきた。しかし城西大学という組織の中で果たすべき役割として考えるならば，学生募集にどのような関りを持つことができるのか，地域連携との関りはどうか，社会貢献との関りはどうかなど，今後の課題は山積していると言える。またセンターや教員として，どのような知を学生や社会に還元できるのかも考え，実行し続ける必要がある。

20年間の足跡を振り返り，改めて感じることは，センター所属の教職員（非常勤講師を含め）が常に一丸となってさまざまな問題に取り組んできたという事実である。その背景には，自由な発言が許されるという空気感があった。それを作り上げてくれた諸先輩方には感謝の念で一杯である。果たしてその空気感を現在も受け継ぐことができているのかどうか，甚だ心許ない。今後はその空気感を蘇生させることができるよう努力したい。

またこれまで達成してきた試みの多くは，上からの強制ではなく，各教員の自発的な行動や発案によってなされてきたことも，センターの活動の特徴だと言えるだろう。もちろんスピーチコンテストのように，突然実施を強制されたものもある。しかしそれを計画し，実行に移す段階では，センターの活動として行う意義を共有し，「やらされている仕事」ではなく，「やるべき意義のある仕事」として取り組むことができていたように思う。

これからの語学教育を取り巻く環境を考えるなら，決して楽しいものばかりではないことは明らかである。新入生の学力の問題，少子化の加速などなど課題は山積している。しかしそれでもなお，本学で学ぶ学生を中心に据えながら，「学生のための仕事」「社会に有為な人材を社会に送り出すための仕事」という観点から語学教育の在り方を考え続け，さまざまな試みに挑戦し続けて行きたいと思う。

沿革

2004年 4月　　城西大学語学教育センター設立
　　所長　森田昌幸
　　（英語13名，フランス語2名，ドイツ1名，日本語3名，その他1名）

2005年 4月	新入生プレイスメントテスト実施（経済学部，経営学部対象）
2008年 3月	春季TOEIC対策集中講座開始
4月	Language Lounge 開設
2010年 4月	ハンガリー語開講
7月	TOEIC奨励制度開始
2011年 4月	英語集中トレーニング，中国語集中トレーニング開講
10月	第1回城西大学英語スピーチコンテスト開催
2012年 2月	英語入学前指導開始
12月	第1回城西大学中国語スピーチコンテスト開催
2013年 4月	チェコ語，ポーランド語開講
	所長　越坂部則道
2014年 4月	経済学部，現代政策学部　必修英語を半期1科目2年間に変更
	マレー語開講
2015年 5月	創立50周年記念国際教養講座開催
～11月	
2016年	アンケートに基づく授業改善計画の作成開始
2018年 4月	新英語カリキュラム開始
	授業参観制度導入
	所長　若林俊英
2020年11月	城西大学英語エッセイコンテスト開催
	（コロナ禍による英語スピーチコンテストの代替として開催）
2022年 4月	所長　大橋稔
2023年10月	第9回城西大学中国語スピーチコンテスト開催
11月	第12回城西大学英語スピーチコンテスト開催
2024年 3月	（英語7名，中国語担当1名，日本語担当2名）
4月	必修英語を半期1科目1年間に変更

《註》

1　語学を学ぶ環境整備に関する取り組みについては，大橋稔「城西大学で学ぶ語学のこれまでとこれから：環境を整えることを中心に」『こまがわ』第36号（2024年3月：18-19頁）に概要をまとめた。

2　スピーチコンテストを行う意義，目的については大橋稔「スピーチコンテストをなぜ行うのか：地域との繋がりを目指して」地域連携センター『地域と大学』第4号（2024年3月：136-137頁）に概要をまとめた。